

# 奨学金留学生事業 留学成果報告 (学部留学生)

当協会の奨学金留学生事業では、日本の大学で学ぶ台湾からの留学生を支援しています。学位を取得するまでの期間支援する長期奨学金と、最長1年間の交換留学を支援する短期奨学金があります。

今回は、今春卒業した長期奨学金留学生（学部留学生）の日本留学経験についてご紹介いたします。

## 1. 日本留学生生活を振り返って

筑波大学 劉承衛

私は筑波大学の人文・文化学群比較文化学類において、中国近現代史を勉強し、卒業論文は胡適という知識人をテーマにしました。今は学者を目指して、筑波大学大学院の歴史・人類学専攻で近代中国と戦後台湾の知識人及び思想について研究する予定です。

私は中学校の頃から台湾と中国の近現代史を勉強し始めました。その過程において、歴史に対する解釈と評価は立場によって変わると気づき、当事者以外の視点から捉える必要性を感じました。そこで、同じく東アジアの一員として、過去と現在、そして未来でも両方と深い繋がりを持つ日本が、台湾と中国の近現代史の研究を行うのに最適な国だと考え、日本留学を志望しました。

しかし、母子家庭にとって、大学進学及び日本留学に伴う経済的負担は非常に重いです。幸いなことに、日本台湾交流協会の奨学金は入学金、授業料、そして生活費まで支援してくれます。奨学金により、台湾での母の負担も少なくなり、私も学業に励むことができました。仮に日本台湾交流協会奨学金がなければ、私は日本に来ることもできず、大学に進学し、勉強と研究を続けられませんでした。日本台湾交流協会への感謝の念に堪えません。

大学生にとって、絶えず知識を吸収することが最も重要だと私は考えます。そのため、私はよ

く毎月の生活費で学術書を購入します。大学では主に歴史を勉強していますが、他には政治、外交、社会、民俗、宗教、文化理論などに関する本も購入し、他分野の勉強もしてきました。「人文社会学」という学問体系における知識は互いに強い関連性を持ち、専攻以外の知識も思考の材料になり、今後の研究に役に立つと私は考えています。その例として、民俗学の授業が日本に来て最も印象に



筑波大学新聞に掲載された「筑波大学桐政会」に関する記事

残っています。フィールドワークを通じて、日本人と日本文化の具体像を探る柳田国男をはじめとする日本の民俗学者達の姿勢は、多角的に台湾について学ぼうとしている私に、非常に大きな衝撃を与えました。

日台交流のために、大学での四年間、私は授業、サークル、課外活動において積極的に台湾と中国に関して発信しました。

授業では2020年総統選の分析、漢民族の民間信仰、台湾籍日本兵、音楽とひまわり学生運動、JLPT・EJUと日本語能力の測定、タイヤル族の信仰を先生及び学生に発表しました。

サークル「筑波大学桐政会」では、私が会長を二年間も担当をしました。ここでは、メンバー達は時事問題に関する様々なテーマに基づいて発表と議論を行います。私は主に台湾と中国の政治・外交・社会について発表しました。兩岸関係はもちろん、選挙、政党理念・政策、少数民族、自治区、民主化、「一つの中国」、台湾有事、香港と一国二制度、政党支持、アイデンティティーなど、私はサークルの運営を取り組みながら、メンバーに中国と台湾について分析・説明しました。

課外活動の「歴つくば」とは、筑波大生による歴史を対象にした自主学習会です。学生の中で登壇回数が最も多い私は、日本統治時代、戦後中華民国の統治政策、日華外交史、台湾の脱植民地化、孫文の三民主義、台湾の白色テロ及び移行期正義、台湾史の視角、中国と台湾から見る中国近現代史、中国のリベラリズムなど、基本的に台湾の歴史について発表しました。

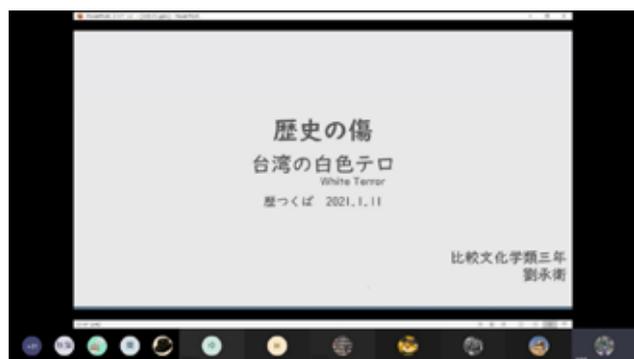
『雙峰論叢』というもう一つの課外活動は、寄稿者が自らの学び及び思考を文章にまとめて発信

する論文誌です。私は主に中国と台湾の政治体制、イデオロギー、国民意識をテーマにして、合計七篇の文章、全部で十五万字を書きました。

この四年間、「更に台湾のことを伝えたい」という気持ちで、私は台湾に関する様々な時期とテーマを発表しましたが、台湾だけにとどまらず、私は中国についても発表してきました。その過程の中で、私は日本人学生と交流する機会を多く得て、台湾と中国に対して、今の日本の若者たちはどう考えているかについて少しでも理解できたように感じました。台湾と中国の両方に関心を持つ私は「台湾を知るためには、中国を知る必要もある」と考えています。そして毎回の発表の後にももらった学生の方々からのコメントは私の考えを更に強くしました。

「交流」というのは相互的な概念です。日本を知ることだけではなく、日本の方々に台湾について発信し、交流と理解を促進することが、我々日本台湾交流協会奨学生の責任と義務だと私は考えます。

今までの四年間も、今後も、日台間の相互理解



「歴つくば」で行った台湾の白色テロ及び移行期正義の発表



栃木県足利市石尊山の「梵天祭り」を対象にした民俗学実習のフィールドワーク

及び友好促進のため、私は日本で台湾と中国の近現代史を研究し、研究実績を積み重ねて、成果を発信したいと思います。日本の大学で教鞭を執り、近代中国史と戦後台湾史、いわゆる中華民国史を中心とする日台間の学術・社会交流を促進させる

ことができる研究者になることが私の目標です。大学院に入った後も、日台間の架け橋と留学生の模範として、勉強と研究に尽力し、この目標を追いかけます。

## 2. 日本に留学し、人と出会う

一橋大学 Yang Chinerh

日本に留学することを決めたのは2017年のことだった。ただ日本に行きたく、不安と期待が混じった気持ちだった。こんな中で、日本台湾交流協会及び日本語教育センターの方々はこの不安を払拭するように、ビザ申請、渡日手続きから進路相談、そして日本の文化を理解するためのイベントまでも主催してくれた。さらに同じプログラムで渡日する仲間が10人もいることは非常に心強いことである。お陰様で第一希望の一橋大学に合格することができた。しかし、仲間と別れ大学に入った時はやはり少し寂しかったものの、将来お互いの大学のある町にも旅行し、会いに行く約束も交わした。こうして、一橋大学での新しい生活が始まった。

一年生の筆者は「忙しい迷子」だった。なぜなら、多くの新歓イベントに加え、どの履修を組むか、どのサークルに入るかなど決められなかったからだ。その結果として、一時期三つもの部活・サークルに同時に所属し、それぞれの活動に参加するのに精一杯だった。その中で、特にお世話になったのは日本台湾交流協会の奨学金留学生先輩

だった。筆者と同じく一橋大学法学部に所属する先輩は2年上の一人だけ。先輩からは履修情報・アドバイスだけでなく、120サイズのダンボールにも収まらないほど教科書・参考書もいただいた。そのおかげで、筆者も順調に学びたい知識を修得し、卒業できた。ここで一橋大学の学部間の壁の薄さを実感できた。すなわち、特定の学部しか履修できない授業がほぼなく、寧ろ他の学部の授業を積極的に取らせる履修ルール。このカリキュラムだからこそ、異なる分野の勉強をしたい筆者はその目標を達成でき、法学部でありながら経済学副専攻を完成した。さらに、先輩からいただいたものをまた日本台湾交流協会の後輩に渡し、経験もシェアした。また、一人で留学する不安も、共に留学する同期がいるため、少なからず解消された。こうして、交流協会奨学金プログラムはこのような貴重な繋がりをくれた。

2年目以降はサークルの活動が最も充実時期であった。学生同士でカフェを運営するサークルで「カフェここの」を運営していた。その一環として、母国台湾の味を国立市の地元の方にも味わ



一橋の風景



ルーローハン

っていただきたく、「ルーローハン（滷肉飯）」をメニューに開発した。中華料理は国立市でもかなり人気があり、何軒か店もあるものの、ルーローハン は筆者の知る限りでは初めて登場した。料理を作る経験が乏しい筆者にとっては味を地元の方にも納得していただけるよう、母と友達のお母さんにも意見を伺いし、何度も調整してようやく完成した。こうして、台湾の味は国立市でも味わうことができるようになった。

筆者の留学生生活は4年半（大学入学前の半年の言語学校も含む）ではあるが、振り返れば3年半にも感じる。なぜかと言うと、コロナ禍である。3年生以降は授業が全てオンラインになり、サークル活動もほとんど中止になった。ほぼ人と話せない中、状況が多少落ち着いていた時期筆者は一人旅をたくさんした。その結果として卒業する前に訪問したことのない都道府県は片手で数える程度である（本稿を執筆したときは高知県にいた）。このように多くの場所に訪れたのは単に旅行が好きだけでなく、日本各地の異なる文化・風土を学びたかったからでもある。旅行を通じて、国立市に一生いてもできないことを体験し、会えない人と話して、何らかの形で日本各地の人々と交流できたのではないかと、筆者は思う。

最後の一年を迎える四年生にとって就職活動は最も重要なイベントと言えよう。就職活動を行う中、筆者はよく「どうやって留学しにきた?」、「奨学金のプログラムって何?」と聞かれた。このプログラムの一員であるからこそ、紹介できたものがあつた。受験・出願の経験、言語学校での生活、同期の進路、奨学金の詳細などがその一例である。そして、台湾の文化・生活、日本との違いも話題となった。このように、この特別な経験は面



旅行の一枚

接官とでも、会話を弾ませることができた。

この四年間の留学生生活は筆者にとって新鮮で忘れられない経験となった。これを裏側で支えていただいているのは交流協会であった。同期や先輩後輩のみならず、交流イベントなどで多くの人と話せることができた。そして、一人で未知の環境で暮らすものにとってはなにより安心できる存在でもあつた。このようなかけがえのない経験ができたのは、交流協会のおかげであると思う。そのため、「日本に留学したいのですが」と聞かれたとき、「日本台湾交流協会の奨学金プログラムはおすすめだよ」と筆者は答える。

大阪大学 張嘉芸

### 3. 日本留学生生活を振り返って

日本の大学に留学したいと思い始めたのは中学校の頃だった。日本台湾交流協会の協力で、その夢を叶えることができた。そして、先日、大阪大学人間科学部を卒業し、春から日本の会社で働く。日本台湾交流協会の奨学金のおかげで、留学の4年間では、金銭面で心配することなく、学業

や部活などに時間を費やし、充実した留学生活を送ることができた。大学の4年間、私は学業・部活、課外活動、様々なことにチャレンジしてみた。学業において、実習の授業で介護施設でお年寄りの方にインタビューしたり、外国人を含め多世代の人々が共に参加できる交流イベントを考案した

り、プログラムで他大学の授業を取ってみたいりして、勉強する以外の経験も得ることができた。その中で、もっとも大きなチャレンジは卒業論文の執筆だった。私は神戸市で開催されるマルシェを研究対象として、そこの運営者、出店者、消費者の方々12名ほどに、それぞれ30分～1時間のインタビューを行った。今までの留学で出会ったチャレンジとは違い、学校や団体が用意したい何かのイベントに申し込んで参加するのではなく、自らマルシェの運営の方に連絡し、インタビューの許可をもらうなど、初めてのことが多かったが、大変貴重な経験となった。

また、部活について、私は大学では大阪大学のスキューバダイビング部に所属しており、4年間で日本人でもなかなか行く機会のない世界自然遺産の小笠原諸島や日本の最西端の与那国島など、日本の各地の海でタンクを背負い、潜っていた。もし日本の大学に留学していなければ、スキューバダイビング、この一生続けたい趣味を見つけることができなかつた。部活では、今まで先輩との接し方があまり分からなかつたが、先輩との関係性の築き方を学ぶことができた。そして、何事でも相談できる仲間もできた。

4年間の日本の大学での留学、私が得たものは何かというと、「人との繋がり」と「コミュニケーション力」だ。日本の大学に留学してはっきりと分かったことは、日本語が話せるだけでは足りないことだ。日本人の輪に入り、日本人のことをよく理解することで、異なるバックグラウンドを持つ私が日本で自分の居場所を見つけることができた。部活で出会った同期、ゼミで知り合った学部の友達、留学の4年間で、本当に多くの日本の方と知り合い、仲良くなることができた。次に、日本の大学に4年間通い、もちろん語学力は上がったが、ここで言うコミュニケーション力はただ日本語を話すのではなく、困っているとき人に頼る力、相手の言葉を聴く力、飲み会でみんなを笑わせる力などがあると思う。4年間の留學生活が経っても、たまに友達が喋ってる言葉に戸惑うときは今でもある。まだ分からない日本のスラング、大阪人のポケのツッコミ方、私のコミュニケーション力がまだ足りないところが多くあると思う。

大学時代出会った人達はみんなそれぞれの道に進むけど、これからまた日本のどこかで、きっと会えると信じている。これからも日本で、自分のコミュニケーション力を磨きながら、台湾人として日本人との交流を続けたいと思う。



ゼミの友達と卒業式で撮った写真



インタビュー調査に協力して下さった農家の方



スキューバダイビング部の先輩と同期